

教職大学院 Newsletter No.145

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2021.5.10(公開版)

実践し省察するコミュニティ 実践研究福井ラウンドテーブル 2021 Spring Sessions ふり返り特集号

2021年2月20日(土)・21日(日)に、オンラインで実践研究福井ラウンドテーブル 2021 Spring Sessions が開催されました。1日目は約500名、2日目は約350名、総勢550名の方にご参加いただきました。

コロナ禍の状況での開催となり、昨年6月に開催された Summer Sessions と同様、オンラインでの実施となりました。経験したことのない状況が続く中でも、日本各地、また海外からの参加者の皆さまと、じっくりと互いの実践を語り合う時間をもつことができました。ご参加いただいたすべての皆様にお礼を申し上げます。

本号は、1日目の各ゾーンの様子について、参加者の皆さまにふり返りをご寄稿いただきました。お忙しい中、まことにありがとうございました。

教職大学院では、すでに6月のラウンドテーブルに向けての準備が始まっています。ふり返り特集号にお寄せいただいた皆様のご感想を通してふり返りながら、6月につなげていきたいと思ひます。

次回の実践研究福井ラウンドテーブルは、以下の日程で開催予定です。ぜひご予定ください。詳細は、教職大学院ホームページで、随時お知らせいたします。

実践研究福井ラウンドテーブル

2021 Summer Sessions

2021年6月19日(土)・20日(日)

オンライン開催予定

実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:
Spring Sessions 2021
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001
実践研究 福井ラウンドテーブル

2021 Spring Sessions
20(sat) 10:00-17:40
21(sun) 10:00-14:10

Cyber Space Co-inquiry and Reflection with Zoom

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究
学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2021.2.20-21

教師教育改革コラボレーション/福井大学・連合教職大学院
福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科
後援:福井県教育委員会 共催:社会教育実践研究フォーラム

内容

ラウンドテーブルふり返り特集号	(1)
Zone A 学校	(2)
Zone B 教師教育	(5)
Zone C コミュニティ	(8)
Zone D International	(12)
Zone E 探究	(15)
Zone F インクルーシブ	(24)

Zone A 学校

21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

—対話を通して学びを深めていくためには—

学びを止めるな

学校改革マネジメントコース2年/勝山市立村岡小学校 北川 喜樹

令和2年度の教育を取り巻く情勢と言え、**「コロナ」**に尽きるだろう。昨年3月の突然の臨時休業に始まり、卒業式や入学式も簡略化や延期。6月の学校再開後も、例年の行事や大会等の多くが中止、もしくは規模縮小に。そして夏休み期間は本来の半分以上。誰もが経験したことのない事態である。しかし、学びを止めることなく、様々な工夫をしながら、多くの学校が今年度を駆け抜けてきたのではないだろうか。

そして今回のラウンドテーブル。学校再開から9ヵ月が経とうというこの2月、この場に集った先生方は特に、学びを止めることなく、工夫し続けてきた方々ばかりではないだろうか。

私が参加した ZoneA では、「20世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」という大きなテーマのもと、「主体的・対話的で深い学びを実現していくための鍵は何なのか」について、それぞれの学校現場がどう向き合ってきたかを通して考えた。

まずは3人のシンポジストの先生方から、各学校での取組をご紹介いただいた。どの実践も大変興味深く、三者三様ではあるが質の高い実践事例が紹介され、「なるほどなあ」と納得することしきりであった。画面越しではあったが、学習コミュニティ構築の第一歩としては、やはり「ビジョンの共有」と「感情の共有」が大切だと再認識した。中でも加福校長先生の実践から、ここ教職大学院での学び方を学校にも活用できる、という内容に大変興味を持った。教職大学院のカンファレンスでは時間をかけて先生方と対

話しながら学んでいるが、意識しないと学校ではなかなかここまで語り合う機会は少ない。

本来、人と人との協力とは、自然に発生するものだろう。協力すればきつとうまくいく、という思いがあるから協力する。仲間と力を合わせて目的を成し遂げたい感情が湧き起こるから協力する。人が互いに協力し、協働することは何も特別なことではない。それなのに学校でも会社でも、協働することが大切とか、協働するための仕組みを作れとか、そういう議論が起こる。もし、私たちの協働を妨げているものがあるとすれば、それは一体何なのだろうか。

ある人は、仲間と協働して仕事を進めたいが、忙しくて時間がないからできないと言う。またある人は、学校内に仲間と協働して仕事を進める仕組みがないからやりにくいと言う。それもあるかもしれないが、果たしてそうだろうか。人は、本当にしたいと思えば、仮に時間や仕組みの障壁があったとしても、何とか乗り越えて前進しようとするものではないか。

結局、人は「したいからする」のだと思う。そう考えると、職場の仲間と「共有したビジョン」のもとで協働して何かに取り組むことで「感情の共有」が生まれ、それによって同僚性が高まり、さらに協働が進むという好ましいサイクルの実現が学びを実践する教師コミュニティへの第一歩だと感じる。そして私たち教員自身が「主体的・対話的で深い学び」を体現しながら学び続けることが、子供たちをその状態に誘う大前提なのではないか、ZoneAでの学びを終えた今、改めてそう感じている。

教師の対話の発展が生徒の対話を発展させる

長野県屋代高等学校 金井 和義

Zone A では、「21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培うー対話を通して学びを深めていくにはー」のテーマのもと、「主体的・対話的で深い学び」の鍵となる対話のあり方に焦点が当てられた会となりました。シンポジウムでは、福井大学教育学部附属幼稚園 副園長 斎藤 弘子先生、松本市芳川小学校 教諭 上兼 淳先生、小浜市立小浜第二中学校 校長 加福 秀樹先生の実践発表をお聞きました。

三人の先生方は校種も立場も実践内容も異なりますが、共通して大切にされていたことは、「自発的な問いかけや発信」「他者との関わりによる自己省察」そして「自己の変容（成長）」という、すべての教育の根底となる理念を蔑ろにすることなく、実践の場で形象化したことだと感じました。

自分自身を振り返ってみると、定期考査や模試、大学入試に照準を合わせた学習進度や学習目標を授業の中心に据え、生徒の自発的な問いかけや生徒同士の関わりをなおざりにしてきたことに気づかされました。また、業務化した仕事に追われる中で自発的な問いを持っているのか、他の先生方と関わり合い互いに学んでいく機会を持とうとしているのか、教員としての成長を実感しているのか、という自身の教員としてのあり方も深く問い糾される思いで発表を拝聴しておりました。

斎藤先生、上兼先生の発表では、子どもたちの自発的な問いかけから始まった教育の実践を報告していただきました。中学・高校現場しか経験のない自分にとっては、発達段階の差はありながらも、子どもたち

が身近な興味関心から問いを立て、他者との協力や葛藤、自分の中でのジレンマなどを経験しながら、それぞれの子どもたちが考えや思いを深めていく姿に驚かされるばかりでした。

また、加福校長先生の発表では、職員一人ひとりが自分事として考え実行する「スクールプラン」のあり方や、職員の主体性と対話を促す「カンファレンス」など、職員間の対話についての実践を報告していただきました。教師は子どもたちの学びのファシリテーターたれ、と近年言われていますが、その教職員集団が日々の「業務」に追われる中で主体性と対話を失ってしまったのは、学習コミュニティとしての学校の機能が果たされないことに改めて気づかされました。

その後のブレイクアウトルームでは、校種や県を越えて先生方と話をすることができ、新たな視野を得る貴重な経験をさせていただきました。子どもたちの探究的な学びをどう仕掛け、どう支援をしていくか。またその学びを幼稚園・小・中・高・大とどのようにリレーをしていくか。一方で、教員同士の対話をどう作っていくか。この2点は校種も県も越えた大きな課題であることを実感しました。そして、この答えのない課題解決に向け、多くの先生方が手探りの取り組みを始めており、そのような先生方との対話を通じて明日からの元気をいただきました。

タイトルに書いた「教師の対話の発展が生徒の対話を発展させる」を来年度のマイスローガンとして、先生方に負けず子どもの学びにつながる教師の対話を積極的に創っていきたいと思います。

子どもの対話、おとなの対話

高浜町立保育所 後 拓真

ラウンドテーブルに参加させていただいたのは今回で何回目になるだろうか。今回はコロナ禍の影響で zoom での参加になり、いつもと違った環境からの参加でそわそわしてしまう。ラウンドテーブルには、我が高浜町立保育所において「子どもの主体性」を求めている保育実践を試みはじめた平成27年度の回から参加させてもらっている。私自身、この保育実践の研究グループのメンバーとしてラウンドテーブルに参加し、発表者としても、話し合いのメンバーとしても、出席回数を重ねてきた。毎回、様々な職種の方のお話を聞いたり、自分達の保育実践の話をしたりすることで良い刺激を受け、「ああ、今年も参加できてよかった」と、同じ研究グループのメンバーと話し合いながら帰路につくのが毎年2月の恒例行事となっていた。

私達保育実践研究グループは、町内公立4保育所から数名ずつ集まって、日々の保育について考え、研究し、まとめを行っている。今回のラウンドテーブルのような研修にも積極的に参加している。各保育所の代表者として、貴重な経験をさせてもらっているとありがたく思う反面、この経験を保育所に持ちかえり、他の職員と共有するという役割も重く感じている。実際、保育実践の研究に参加している者と、その他の職員との間に、隔たりを感じることもある（無論、全員が全員、というわけではないことを書き留めておく）。それは、保育への熱心さや技量といったものではない。しかし、形容し難い、何か。保育実践のまとめに向けての、「理解のなさ」というか、どこか“他人事”と思われている、と感じるのだ。自分自身の発信力のなさも十分心得てはいる。しかし町立保育所として、職員全員でステップアップしていくことを目指してこそその保育実践研究である。何か手はないものかと、研究メンバーみんなで頭をひねっていたものである。

そこへ舞い込んできた、今回のラウンドテーブルの概要。片道2時間のハードルを一気に取っ払ってくれた zoom。保育所のパソコンでなら、みんなも参加できるではないか。私の名前でエントリーしたが、そのカメラの画角の外からは、約20名の職員が発表を視聴していた。傍らに用意したホワイトボードには、みんなの感想や疑問が次々埋まっていく。ありがたいことに、代表で話す私のカンニングペーパーをみんなで作成することで、みんなが意識を持って参加できていると感じた。後日、参加してくれた職員に話を聞いてみると、「今まで参加するきっかけがなかったが、話が聞けて良かった。ラウンドテーブルってこういうのなんだとはじめて知った。実践研究グループのみんなはあんな風に参加しているんですね。」と率直な感想が返ってきた。

そして、今回のラウンドテーブルの内容においても、職員みんなに参加できてよかったと思える金言があった。“対話”こそが私達に足りなかったのだと、気付かされたのである。発表のなかには、子ども同士の対話、おとな同士の対話、それぞれの大切さが織り交ぜられていた。職員同士の対話の重要性について、各々が日々の自分の姿を思い返ししながら発表を聞いていたことだろう。ホワイトボードにも“対話”の言葉が並ぶ。みんなも対話が大切であることはわかっているながらも、それが十分にできていなかったと感じていたのだろう。今回のラウンドテーブルにみんなに参加できたことで、同じ問題意識、いや、解決の糸口を共有できたのではないかな。

毎回ラウンドテーブルに参加した後の、「参加してよかった」という思いが、今回は多くの職員で共有することができ、その後の“対話”のなかにも、小さいながらも花が咲いていた。今後も職員同士の対話を大切にして、保育に還元していけるようにしていきたい。

Zone B 教師教育

働き方改革と学び合う学校づくり

ー組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメントー

働き方改革と学び合う学校づくり

ー組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメントー

福井大学連合教職大学院 非常勤講師 中川 美津恵

コロナ禍に立ち向かい、教育界では様々な試行錯誤を経てオンラインと対面を併用し教育活動を推進するなど、成果を上げています。長期間にわたる休校後、再開された学校現場では授業時数の確保に悩みながらも、体育祭や修学旅行などの行事で3密回避、マスク着用に努め、子どもたちや教職員、関係者が話し合い、創意工夫を重ね、協働的で感動をもたらす体験活動に結実させてきたように思います。特に子どもたちが活動の当事者となり、企画し実施していく過程の中で人間関係を形成し主体性、自主性を示したのは目を見張りました。そして、その子どもたちを支えてきたのは教師であり、改めて教師教育の重要性に思いが募ってまいります。

Zone B「教師教育」のテーマは「働き方改革と学び合う学校づくり」。予測困難な時代に社会の担い手となる子どもたちの資質能力を育むため、教師が協働して教育の質的向上を図ることを働き方改革と両立させながら取り組もうという難問です。

提案する話題や報告について、企画段階では ①学校現場と行政の双方の立場・視点 ②県内外の多様な実践 ③異校種(幼小中高)の実践 ④マネジメントの視点、というような観点で検討を進め、当日は最高のメンバーをお迎えしての開催となりました。

まずは県教育庁星教育政策課長(文部科学省から出向)による話題提供。コロナ時代に現場で目指すICTの活用や働き方改革に向けて具体策が紹介され、明日からの心強い指針となりました。

最初の実践報告は長野県諏訪市立高島小学校小川研究主任による「白紙単元学習」の取組について。子どもが自己更新していく過程を丁寧に見取り、教師も省察を基に構想を編み直すという動的な授業は極めて質の高いものと感じました。

2番目は福井市森田中学校高間教頭による報告。現状分析に基づき皆で課題を共有しながら学校改革を進め、自身は得意分野を活かして先生方を支援するなど、学び合う実践コミュニティを作り上げていく過程が具体的に熱く語られました。挑戦する勇気とパワーをいただいたように思います。

3番目は福井県立藤島高等学校松田校長による報告。21世紀のリーダー育成に向けてSSH事業を柱に、働き方改革の視点で学び続ける教員コミュニティを支援し、次世代を見据えたカリキュラムマネジメントに教職員一丸となって取り組む様子がよく伝わってきました。

最後に本学大学院寺岡客員教授がZone Bについての的確に要点をまとめてくださったので、次の小グループでの話し合いにうまくつながりました。

続くグループセッションでは話題提供、実践報告を受けて、各自の職場でどう活かすか、学校の実情、学校が抱える悩みや課題を率直に語り合い聴き合っており、協働で探究する充実した時間を共有できたと思います。

当日は周到的な準備と粘り強いマネジメント力のおかげで運営もスムーズに進行し、Zoomも順調で、有

意義な時間を持つことが出来ました。ひとえに本部
詰めのスタッフの力に負うところが大きいと感謝す
る次第です。

ラウンドテーブルでの教師教育の発表は 実践の評価の場！

福井市森田中学校 高間祐治

縁あって実践研究福井ラウンドテーブル 2021・ス
プリングセッション ZONE B 教師教育での発
表者を依頼された。福井市至民中学校で勤務してい
るときなど何度か発表したことがあるが、今までの
発表は学校に依頼されるもので、研究主任等の立場
で私が学校代表として発表していたものであったが、
今回は、私が教頭として実践している内容に対して
の依頼であったので、今までとは違う心境であった。
評価・信頼されているようでうれしかったが、その反
面、私のような 1 年目の右も左も分からず、ただが
むしゃらに取り組んでいる新米教頭の実践が、果た
して発表するに値するのか？小学校や高等学校の立
派な発表者と肩を並べて良いのだろうか？と不安の
中での実践発表であった。しかし、こういう機会でも
ないと、なかなか自身の実践に関して時間をかけて
省察することもない。また、一人職の教頭で取組を簡
単に比較もできない。ならば評価をもらう場にした
いと考え、発表原稿作成に取り組んだ。

コロナウイルス感染防止対策や働き方改革、新学
習指導要領に応じた授業改革と取り組む内容は多様
で、何が正解か分からなかった。心がけたことは、校
長先生と密に連携し、思いを汲んで自分の得意なこ
とから始めること。そして教諭目線で先生方の手助
けとなるよう、サポートに徹する取組をしていくこ
とであった。①地域・保護者の信頼獲得に向けての働
き。②働き方改革の視点からのサポート。③授業改革

のための参観記録による教師教育などが主な取組で
あった。これらを中心に発表原稿にまとめていった。

発表のパワーポイントを作成する中で、これらの
取組方針の正当性や私の思い・苦悩は独りよがりな
ものなのか、共感できるものなのか自身で省察しな
がらもどんどん評価してほしくなっていた。

発表自体は内容が盛りだくさんになってしまい、
決して良い発表ではなかったし、リモートであるた
め、発表時の参加者のリアクションが感じにくく不
安であった。しかし、遠い県からも参加していただい
て多くの方に思いを伝えることができて良かった。
発表後のグループ協議にも参加させてもらい、その
グループ内では私の発表を受けてより深い話し合い
ができてとても有意義であった。特に授業の参観記
録の取組は、全員分を書くのは大変であるが、参観記
録をもらった各先生方がそれを読むことで、確実に
自身の成長に繋がり、授業改革が進んでいくと賞賛
された。

今回のラウンドテーブルで、この 1 年間の取組が
参加された皆様に高く評価されたことで、2 年目を迎
える来年度の支えとなった。自信をもって向かって
いきたいと思う。この機会をくださった福井大学連
合教職大学院に関わる皆様には感謝の気持ちでいっ
ぱいだ。

ラウンドテーブルを終えて

学校改革マネジメントコース1年/福井市足羽第一中学校 宮口 正樹

子どもの主体的な学びを実現するための授業改善が進む中、学校現場では業務改善や教員の働き方改革が喫緊の課題にもなっている。私が参加した「ZONE B 教師教育：働き方改革と学び合う学校づくり」では、自分たちの目指すところ、そして直面する課題の両面を捉えたテーマが設定されていた。

まずは、福井県教育庁教育政策課長の星匡哉先生から話題提供をしていただいた。県のマネジメント研修や教職大学院で学びを進めてきた私自身、働き方改革は待ったなしと捉えている。ただ、それを推進する際、定時退庁や部活動休養日の設定などだけにとらわれてはいけないことを学んだ。長時間勤務になるタイプ、それを改善するタイプ別の取組、個人レベルでなく組織で行うべき取組など、そこにはデータに裏付けされた確かな科学的知見があった。その知見のあるマネジメント層と、自身の狭い経験や古い認識だけのマネジメント層では、組織に与える影響には大きな違いがある。先生方の「自分の働き方は、自分で決める。」ことを支援し、組織として生き生きとした協働を進めていくためにも、マネジメント層が学び続けることの大切さを改めて捉えることができた。

次に、諏訪市立高島小の小川先生、福井市森田中の高間教頭先生、福井県立藤島高校の松田校長先生から、各校での実践報告をしていただいた。高島小では「白紙単元学習」として、子どもの主体的な学びの中

で、子どもと教師が学び合っていくコミュニティの姿があった。森田中では、16時半退勤や4人グループでの授業研究など、働き方改革と教育の質の向上の両面が実践されていた。藤島高校では、教員のコミュニティを形成・持続しながら、学習観や授業観の転換が実践されていた。実践報告に対する講評として寺岡先生からは、学校現場で、日々働き方改革と教育の質の向上という2つの課題に直面している私たちに、今一度何を捉え、どのようにチャレンジしていくべきなのかを示唆していただいた。

今回のラウンドテーブルもオンラインでの開催となり、直接先生方と語り合いができない残念さはあったが、それ以上の学びや気づきを得ることができた。私は働き方改革の推進派である。ただ、それやみくもに進めるのではなく科学的知見、先生方のタイプ、適切な方策などを編みこんでいくことで、働きやすい職場環境ができ、本当の意味での「子どものために」働くことができると学んだ。また、各校で子どもの主体的な学びへのチャレンジが進められていることも分かった。私の勤務する学校でも、それに負けない学びを進めていかなければならないと痛感した。

私の実践研究報告のタイトル「学び続ける意味」を今回も体感できたラウンドテーブルであった。コロナ禍の中、今回のラウンドテーブルを開催していただいた先生方に感謝し、感想としたい。

ラウンドテーブルを終えて

ミドルリーダー養成コース1年/カリタス幼稚園 西川 くるみ

オンラインでの対話にもだいぶ慣れてきた2月。ラウンドテーブルで2日間集中してお話を伺い、皆

さんとの対話をとおして自分自身の取り組みを振り返る機会をいただいたことに感謝いたします。今年

は誰もが試練の中で新たな挑戦をすることとなりましたが、そんな中でも理論と実践が見事に往還された実践報告を聞くことができ、ただただ感銘を受けるばかりでした。どの実践も、子どもがまんなかで、それを支える大人たちの仕組みづくりや協働の姿が感じられました。普段は接する機会のない教育に携わる様々な立場の方との出会いや語らいの中で、私の実践を支える大きなものを感じます。実践を重ねていく営みを振り返った時に自分の信念と、出会いが模様を織りなしていく、そんな風に感じました。教

職大学院に通う先輩方が風通し良く、協働するコミュニティを作ってきたカリタス幼稚園の中で、私もミドルリーダーとして何ができるか、成果を上げることができているかと不安になったりもしますが、昨年度子どもたちと取り組んだ生き物の飼育をとおしての実践と、身体作りの取り組みについての拙い実践報告も聞いていただき、様々な感想や励まし、共感をいただきながらたくさんの心に響くキーワードが与えられ、明日へのエネルギーになっております。

Zone C コミュニティ

持続可能なコミュニティをコーディネートする ーコロナ禍において学びをつなぐー

息吹くコミュニティ、静かに滾る Zone C

福井大学連合教職大学院 非常勤講師 水野 幸郎

コロナ禍、いろいろなコミュニティで普通にしてきたことができない状況が続いている。

Zone C では、「持続可能なコミュニティをコーディネートする」というテーマのもと、公民館や学校などを中心とするコミュニティの活動を振り返り、その物語からの気づきを共有し学び合ってきた。

2020年4月、緊急事態宣言が発出され、すべての活動が一時的に停止した。混乱が続く中、6月のラウンドテーブルでは、「コロナ禍状況におけるコミュニティの学びの展望を拓く」というサブタイトルのもと、何かできることはないかと意見を交わした。

福井県では感染症対策が功を奏し、県内の公民館などの活動が工夫して実施されている。それらの新聞記事を、天方先生がスライドや趣旨説明で紹介することでコミュニティの活動が持続されていること

を確認することから2月ラウンドテーブルは始まった。

こうした状況を踏まえて、今回は「コロナ禍において学びをつなぐ」ことをテーマとした。セッションⅠでは、福井市春山地区、岡保地区の活動について話題を提供していただいた。

春山公民館主事、谷口舞衣子さんに、担当する昨年から地区で始まった成人式のイベントを、感染対策など工夫することで継続することに決定し、実施したことを報告していただいた。協力者を集め、リモートで開催する企画は準備に苦労があったが、当日大雪であったこともあり、かえってリモートが功を奏し成功に導くことができたことを、コーディネーターとの和やかな対話により伝えていただいた。大変さも感じられたが、行事をつないでいこうという熱

意と高揚感が伝わり、ウィンドウ越しにも温かなものが感じられた。

岡保公民館運営審議会委員長、天谷弘之さんは、コロナによりこれまで続けて来た行事について実施するかどうかも含めてそのアイデンティティーまで検討することになったことを話された。今まで20年以上にわたって地域のために、体育施設を活用した東山アクアスロン大会や地元のコシヒカリと湧き水による日本酒造りなどを立ち上げ継続されてきた。引っ張り続けて、ふと立ち止まる機会を得たとき後継者問題にぶつかったことや、意識の変化や事業をこなすことが目的となり負担感が増した行事を、やめるという選択もあるのではと悩んだことなどをたんと話された。ギャラリービューのみなさんが息をのんで聞いているのが伝わってきた。

夏の講習で「コミュニティ・オブ・プラクティス」を熱心に読み込まれていた主事さんたちには、本に書かれているコミュニティの成熟、維持・向上、変容を目の当たりにした気持ちだったのではないかと想像する。ここ何十年間にわたって、親密で安心して過ごせるコミュニティが崩壊が続いている。コロナ禍、本当に親しい人たちとのコミュニティさえも維持できなくなるという現実と直面して、乗り越えようとする意思がお二人の話に感じられた。

二つの報告を踏まえて、グループと全体での協議が、気を引き締めつつ和やかに進んだ。ファシリテータの要請により県外の何人かに、グループ協議の様子を話していただき、全体で共有した。私のグループにも神奈川の大学の先生がおられて、1年を通してリモートでの講義を余儀なくされたという話をされた。デジタルだけでは限界でハガキを通じたやり取りで、

ぬくもりを伝え合ったということでした。オンラインだけではぬくもりのある親密なコミュニティは形成できず、オフラインの交流が必要なのだと痛感した。

セッションⅡでは、福井大学教育学部の3年生、白越充、大畑颯人、山登信真さんたちが「探究ネットワーク」の取り組みについて話題を提供してくれた。この活動は学校が週5日制となり子どもたちの土曜日の居場所が必要になったことなどから、1995年にスタートした。大学生と子どもたちが、「もぐもぐブロック」「ひらめき☆理科ブロック」など9つのブロックに分かれてプロジェクトに取り組んできた。今年度は、自粛期間をすぎてオンラインで活動を始めたが、どうしても対面で子どもたちと調理や理科実験などの活動をしたいといろいろな調整や準備を重ねて、日常を取り戻そうとコロナ対策を徹底するなどの奮闘が語られた。子どもたちのために信頼と親密さを体験できるコミュニティの創造の物語は聞いているすべてのものに、希望を感じさせてくれるものだった。

この活動を通じて、原則全員参加の新1年生が同級生や先輩との交流が実現し、新しい小さなコミュニティの形成にも貢献していることが伝わってきた。全国では、リモートのみで鬱々とした状態が続いた大学一年生が多い中、福井大学では探究ネットワークの活動を通じて、出会い、つながり合い、自分の居場所として安心できるコミュニティが形成されている様子が共有された。若い人たちのエネルギーに触れ、あらためてコミュニティの意義と意味を教わった気がする。

人と人がつながる

福井市清明小学校 加藤 儀直

新型コロナウイルス(COVID-19)による世界的なパンデミックは、私たちの生活を大きく変えることとなった。ソーシャルディスタンス、3密などようやく定着し、令和の新たな取り組みも各所でスタートし

ている。Zoomなどオンラインが当たり前になりはじめ、これまでは目的の場所へ行くまでに時間がかかっていたことも、今では自宅で気軽に参加できるようになった。10年前は、このような世の中になるな

ど予想することができなかったが、今後 10 年間はこれまで以上に当たり前を問い直すことが求められるのだろうと感じる。

ZoneC では、2020 年 6 月のセッションからコロナ禍において新たな学びをつなぐことをサブテーマに議論を重ねてきた。今回も継続したテーマでのセッションとなったが、話題提供のあった事例からはコロナ禍の中でも前に進もうとしている様子が伝わってきた。しかしながら、全てのコミュニティで事例のようなことができていとは限らない。上手いかわからないのはなぜか、上手くいすぎるのはどうしてか。様々な問いに答えていくと何か一つの光が見えてきそうである。

1. つながる

臨時休業明けの子どもたちを見ていると、約 3 ヶ月で失われたことは子どもたち同士のつながりであったと感じる。しかし、元のようにするわけにはいかず、新しい形で学級作りがコロナ禍では必要であった。そのためには、一人一人が「学校へ来る」ことを問い直していく必要がある。そもそも、なぜ学校に来て学ぶのか。学校に来て友達とたくさん対話を重ねること、たくさん悩むこと、どれもオンラインで実施可能なことである。しかし、全てオンラインでは友達同士日常的にコミュニケーションをとることが少なくなり、一人で考え続けることに終始することになってしまう。おそらく、子どもたちが学校へ来て学ぶことは友達と協働で学び合い、力を、能力を高めていくことができる「場」の一つとして価値があるのであろう。だから、「つながる」というのは重要であると言える。

2. 「場」のコーディネート

私たち大人がはじめて経験すること。当然、子どもたちもはじめて経験することである。私はこの 1 年間、様々な活動を子どもたち主導で進めてきた。1 年生との交流会、授業参観の発表、前担任の先生への合唱など、コロナ禍の中ではこれまで通りにできないことがほとんどである。経験不足の子どもたちに多くのことを考えさせて活動を創ることは時間がかかるが、振り返ってみるとそのプロセスが大切であったように感じる。具体的には、一人一人異なる価値観に気づき、多様な考えにふれることで、考えは少しずつ違っているけど目指すところは同じであることに気づいていくことである。そのために、担任は活動の目的等をしっかりと伝える必要があり、全員が同じ方向を向くことができるようにしていかななくてはならない。

このようなことは、公民館の事例報告や探求ネットワークの事例でも紹介されており、コーディネーターの力量がポスト・コロナの時代に求められてくるように感じる。

3. むすびにかえて

私が今年度担任をしたクラスの学級目標は、「Sea～光輝く 26 の星～」である。あと数日で、1 年間のストーリーが終わろうとしている。1 年前、まだまだ幼い子たちであったが 1 年間で大きく成長を遂げてくれた。それはまさしく、夜空に輝く星のように輝いている存在になってくれた。「人と人とのつながり」からは本当に大きなものを生み出すことができる。コロナ禍の今だからこそ、たくさんの「人」とつながることを大切にしていきたい。

ラウンドテーブル 2021 を振り返って

勝山市遅羽公民館 嶋田 美穂子

6 月に初めてラウンドテーブルに参加したときは、慣れない Zoom でのコミュニケーションに戸惑い、最後まで妙な緊張感が抜けなくて、とても疲労しました。今回は 2 度目の参加ということもあり、少しリ

ラックスした気持ちで臨むことが出来ました。6 月に同じグループのファシリテーターをしてくださり感銘を受けた大学の先生と再会できる偶然もあり、私

にとって、立場を超えたところでの繋がりを実感できる、貴重な体験となりました。

Zone C のテーマとなった「持続可能なコミュニティをコーディネートする～コロナ禍において学びをつなぐ～」という大きな課題は、時代の移り変わりによって少しずつ変容しつつあるそれぞれのコミュニティの在り方そのものを問われているような部分もあり、いろいろな先生方や、事業に取り組むみなさんのエピソードを聞いて、考えさせられることが多くありました。資金調達をどうするか、後継者をつないでいく方法や、事業そのものの寿命についてなど、様々なご意見を聞く中で、コロナ禍でひとり悶々と考え続けていた地域の課題や事業に対するヒントのようなものを感じ、得るものが多くありました。

特に印象的だったのは、2 日目のグループセッションでの実践報告で、外国にルーツを持つ子どもたちへの語学支援をしている先生のお話を聞いたことです。まだ幼い頃に外国から日本にやって来た子どもたちに対する支援の難しさについて話しておられ、子どもたちは母国語の獲得も完全にはできていないので、母語の会話も文字を書くのも中途半端、かといって日本での生活にも馴染めていないため日本語の獲得も難しく、母語と日本語、どちらの文法の習得もおぼつかず書くこともできず、どっちつかずで言葉の学習を置き去りにされてしまった子どもたちが増えている、という切実なお話を聞きました。言葉の獲得はそのまま“考えることの獲得”を意味し、考えることは思慮深さや我慢すること、危険を回避する手段を見つけ出す力など、子どもが成長していくためになくてはならない力を育む土台となるはずのものです。その教育がなおざりにされているという状況を危惧し、学習教材の見直しや、専門性を持った対応が不可欠であることなど、デリケートな問題を含む

多くの課題があるということを知りました。学習方法についての具体的なお話もあり、その中で、独自に教材の内容を見直して、もっと子供たちが言葉を楽しく上手に獲得できるためのツールや環境を作り出そうと努力されている様子を聞き、教育の現場で本当に身を削るような大変な思いをされていることに、ただただ頭が下がりました。

お話の中で、先だってお亡くなりになられたという恩師の方の言葉に「学級を変えなければいけない」というものがあり、それについての真意や関わった子どもたちへの熱意のようなものも伝わってきて、とても心を打たれました。「ことに言語の獲得においては、博物主義ではなく共生に向けた語り合いのような場が必要なのではないか、子どもたちが一緒に問題を解きあったり、自発的に子供同士が教えあうような環境を学校教育の場で行えないのか、一斉教育ではなく、共に学びあう、このラウンドテーブルみたいな教室づくりができないか…。」

話を聞いていて、それはそのまま「持続可能なコミュニティとは何か」という問いに対する答えにつながっていくのではないかと感じました。社会教育という側面から地域のコミュニティ活動に携わる立場として、この先もまだ続いていくコロナ禍の中で、微力ながら自分には何ができるのか…。あきらめないで、ささやかな問題をみんなで語り合い、笑いあうことを続けていけば、共に暮らす地域の方と一緒にまたちがう景色が見えてくるのではないかという期待と共に、今回のラウンドテーブルに参加できたことで、少しだけ自分の置かれている状況や立っている場所が見えた気がします。これから、現場に戻り、また地域の方と一緒に何ができるか、改めて考えていこうと思いました。

Zone D International

International Initiative on Teacher Education Reform

Perspectives on “Reflective Lesson Study”

Building Sustainable Reflective & Professional Communities through Round Table & Lesson Study

Jesuit Secondary School, Malawi Moyo Ganizani

The February, 2021 Fukui Roundtable Symposium is an example of how reflective communities of practice may be developed and sustained. It was a wonderful time for experience sharing among professionals across the world. But in addition, we may also consider regional meetings to enhance participation and frequency.

On February 20, we shared reflective and professional learning in Zone D as coordinated by Pauline Sensei of University of Fukui.. Three presentations were made and the group members interacted very well by sharing experiences with reference to the presentations. Important questions and comments were put forward for professional enhancements. It was clear that pupil to pupil as well as pupil to teacher interaction is crucial for reflective learning. Pupil feedback and inquiry learning has to be reinforced for effective learning communities. Teacher to teacher interaction is also paramount in reflective practice. Teachers need to be given chance for reflection at their most relaxed atmosphere. This may be achieved through designed meetings where the school organizes a special time and place for teachers from same school meet in smaller and larger groups to share their teaching practice as regards to their learners. It may be a good

time to share general challenges and improvements that may be needed to boost up pupil participation and knowledge gain during learning. RoundTable meetings are also good time for teachers to share their professional gains and experience. This may include teachers from other schools as well as other professionals as collaborators. Good education must always try to provide for the needs of the particular society.

On February 21, Zone D continued sharing professional and reflective learning. Presentations were made then questions and comments were shared. This was coordinated by Kosaka Sensei of University. of Fukui. I will refer to one of the presentations made, and this was from Philippine on the area of a shape in relation to disaster management plan, such as floods. I learnt from this presentation how to apply classroom reflections and learning to real life situations which education is meant to address. In my opinion, if educators and teachers plan their teaching and learning process in such a manner, learning will be more appealing to the learners. Learning will be much more than just obtaining grades, learning will translate into how societal challenges may be addressed, and learning will enhance innovations that the global world may need

from time to time. For me, any education that focuses much on certification is ‘ill – education’. I therefore, also refer to the presentation by the South African but now working at University of Fukui. that planning our lesson is very important. We need to plan our lessons even if it means taking the whole week also.

Finally I would like to sincerely thank University of Fukui. for the organization of such wonderful virtual roundtable. Thanks all participants from all over the world for your participation and sharing. I share the feeling that as educators ‘we are responsible for guiding the global world and therefore responsible when things go wrong’.

College of Arts and Sciences, Philippines **MARIA LUZ P. VILLARANTE**

The sessions provided an opportunity to re-think about how education works in the context of the NOW. Teachers and Students must appreciate and acknowledge that there are many styles of learning. Education is never a “ONE SIZE FITS ALL” modality. It involves careful and mindful creations of learning experiences for our students. In previous years, reflective learning has come into the education spotlight.

Reflective learning involves students thinking about what they have read, done, or learned, relating the lesson at hand to their own lives and making meaning out of the material. It's more than just memorizing some facts, formulas, or dates. It's allowing all our students to OWN their education, thus, with this sense of ownership, students will commit, be responsive and motivated to generate newer ideas.

There are several advantages of reflective learning for the student, which include:

- Accepting responsibility for learning and, as a result, for the student's personal growth;
- Becoming metacognitive, or aware of internal thinking processes;
- Becoming aware of motives with your actions, and;
- Seeing a link between the work the students are putting into learning and what they are getting out of it.

Therefore, reflective learning really does have its perks. You might be thinking, 'That's great! Everyone should do that!' and you would probably be correct. However, reflective learning takes time and practice. It is a constant reminder to always re-think, re-visit, and re-evaluate all our goals, plans, and implementations, in order that a meaningful and purposive outcome will be realized in all of our students.

Self-assessment as a Teacher on lesson learned

Comboni College Lira District, Uganda **Bongo Emmanuel**

My name is Bongo Emmanuel from Uganda a teacher for Computer Studies/Sub-ICT at Comboni College Lira District a holder of a Bachelor Degree in Information and Communication Technology and currently pursuing Master's degree in Information

Technologies for development (ICT4D) at Gulu University in Uganda.

Reflection helps us as a teacher to improve on our teaching methods for the learners to better understand

topics placed before them and improve on their ability and build on their career goals.

During reflection, at the end of my lesson I always ask simple questions about the topic covered to gauge the students' understanding about the lesson. At times I ask my students to write their concern about my teaching on a piece of paper without indicating their names on the paper. I am able to see what works or not works for different learners. This helps me to improve on my areas of weakness. Am able to identified weak students and had one on one interaction and I was able to see them do better in my subject.

Have seen the relationship between me and my students have improved so much because of the engagements I always have with them and they are interested and wiling to disclose bad behavior among themselves (students).

This is because, students are involved in learning which is a student centered; they own it which makes them eager to learn.

Therefore, learning is a continuous process because every time we are exposed to new phenomena both from the teachers' and students' viewpoints.

Doshisha Junior High School, Japan Numata Kazuya

Thank you very much for everything.

I've been working at a private school in Kyoto City and I attend this roundtable session in every conference. Every time I attend this session, I always feel a relationship between me and the others. We are combined on a global scale and our vision is the same despite the language barriers and differences in cultures. That gives me courage to solve the common problems that are based on education and global issues.

I sometimes end up living a repetitive life and forget the thought that I need to improve my ways of teaching. However, in this session, presenters made me think to try anything that I can do. I feel the need to try something new. I would like to carry out small things better.

I am really happy to attend this session in international friendship and cooperation, sharing ideas. Thank you to everyone who gave me courage.

Santa Laurensia Junior High School, Indonesia Maria Irawati Sumampouw

Fukui Roundtable 2021-Simply Insightful Joining the online 2021 Fukui Roundtable has been a great experience for me. First I want to express my utmost gratitude to all of the team members for all of your effort to make this event possible. Special thanks for Mr. Moyo, Ms. Betty, Mr. Thomas, Mr. Mandy, Mr.Mhawi, Ms.Pauline, and all of the other presenters in the other breakout rooms for all of your sharing.

Listening to all the speakers, and feedback from educational practitioners from different countries and

expertise gave me a lot of insight, ideas, and more importantly encouraged me to do better and broaden my knowledge on the possibilities to develop my own teaching methodology for my students' future. We are all facing our own walls and struggling to break them piece by piece, but the passions I heard for the last two days have given me hope. I am looking forward to another discussion with all of you.

Zone E 探究

学びと教えのニューノーマル協働探究

—大人たちと若者たちによる新しい学びの地図のデッサン—

学びと教えのニューノーマルを協働探究する

長い旅路と新たな船出

福井大学連合教職大学院 木村 優

2020年5月から若者たちと大人たちの二人三脚で走り出した「学びと教えのニューノーマル協働探究プロジェクト」は、2020年6月の実践研究福井ラウンドテーブルで「真の「学び舎」ニュースクールを目指して」と題した挑戦的なセッションで新しい知と関係を創出しました。そしてその後すぐに、2020年7月より同プロジェクトの「2.0」をスタートさせ、2021年2月の実践研究福井ラウンドテーブルまで数々のセッションを開催してきました。

2020年7月の第1回協働探究ミーティングでは「私たちが創りたい社会」をテーマに掲げて対話を始めました。同年9月の第2回協働探究ミーティングでは教育関係者だけでなく経済界の方々やソーシャル・パートナーの方々も招いて、OECD Better Life Index: より良い暮らし指標を活用しながら多様多層な視点から「私たちが創りたい社会」を立体的に具現化していきました。

この間、準備段階の小さなセッションを重ね、「学びと教えのニューノーマル協働探究プロジェクト」に共感・協賛いただく多くの参加者に恵まれながら、2021年1月には金沢チームの主催で第3回協働探究ミーティングを開催し、「私たちが創りたい社会」を見据えて「よりよく生きていくために必要な能力＝コンピテンシー」について対話を深めることができました。

そして、2021年2月の実践研究福井ラウンドテーブルでは、Zone Eのテーマを「若者たちと大人たちによる新しい学びの地図のデッサン」と設定し、チーム奈良のリードのもとで高校生たちの主催によるオンライン・ライブ形式のワークショップを実施するに至り、「楽しい学校」と「評価・受験のニューノーマル」をみなで筆を手にとってデッサンしました。この一連の「学びと教えのニューノーマル協働探究プロジェクト」でデッサンした「楽しい学校」と「評価・受験のニューノーマル」の2つのビッグ・ピクチャーは、その後に続くOECDと東京学芸大学、福島大学との連携によるワークショップへと繋ぐこともできました。

こうして振り返ってみると、「学びと教えのニューノーマル協働探究プロジェクト」は長い旅路の中でたくさんの仲間にも恵まれ、そして探り探り、試行錯誤しながら、みなで乗れて誰も取り残さない、居場所感と安心感あふれる大きくて大らかな船を造りあげ、社会と世界をより良くするための新しい船旅を始めたように思っています。若者たちと大人たちが互いに手を取り合いながら、コンパスを確認し、船首を目標に向け、マストを立て、未知の海原へと舵を切っていきます。

この間のミーティングを繋ぐために参加者間で内容や知恵や気づきを交換する「Love Letter」を発行

してきましたので、そこでの仲間の声を次に紹介させていただきます。毎回の「Love Letter」では3人の仲間に筆をとっていただき、共通する「言葉」を手紙の題としました。ぜひご覧ください。

私たちは、これからも新しい仲間を歓迎し、互いを尊重し、助け合いながら、この長い旅路を進んでいこうと思います。

2020年1月19日 Starting Off Meeting プラスの連鎖

「明日からがんばろう!」「〇〇さんのように前向きに考えたい!」「〇〇学校の取り組みのようにやってみよう!」など、私たちは誰から影響を受け、新しい一歩を踏み出すときがあります。New Normal in Learning & Teaching は、こういった皆さんの気持ちの変化が生み出す絶好の機会です。

Starting Off Meeting では、OECD の Better Life Index に基づいて 11 のテーマでグループディスカッションができました。私は“Community”について話しましたが、参加された生徒の皆さん、先生方から多くの刺激を受けました。自分にはない視点に気づくことで、自分の明日からの考え方、行動が変わります。こういった小さな積み重ねが、自分の主体性 (Agency) につながるもの) を高め、プラスの連鎖を生み出すと考えます。プラスの連鎖が起こっているときに、やりがいや満足感 (自分にとっての well-being) が高まります。プラスの連鎖から、New Normal を創り出せるよう、次回の会も積極的に参加したいです!

新潟市立葛塚中学校教諭・Shingo Kamimura

「初めて会った人と未来のよりよい在り方や自分の地域や学校での困り事を話している」というなんとも不思議な時間と「同じグループになる生徒が何人か、大人が何人になるかぎりぎりまで分からない」というドキドキがこのプロジェクトにはあります。いろいろな地域の学校の生徒や大人が集うわけですから、視点も考え方も様々です。このプロジェクトでの出会いは私の価値観や世界を大きく広げてくれました。そして、このプロジェクトは特別な知識や学歴

があるわけでもない私を受け入れてくれます。ここでは小さな疑問や突拍子もない意見であっても受けとめてくれるので、安心して所属や立場にとらわれずに自分の想いを伝えることができ、この居心地のよさのおかげで、いつの間にか自分自身も自分と違う意見や考えを受け入れられるようになっていました。この不思議な時間を通してみんなで今ある常識を問い直したり、新たなアイデアを出し合ったりするのはとても楽しく、その一方で楽しいだけで終わらない学びがあることが、私がまた参加したいと思う魅力なのだと思います。

福島大学行政政策学類1年・Miku Honta

アットホームな雰囲気に参加できるのがニューノーマルのキックオフミーティングの良いところです。大きなWSの時だけ集まると緊張してしましますが、継続的に参加すると楽しみを見出すことができると思います。昨日のミーティングにて、リラックスしてお話してきたら会話が弾みそうだから「パジャマパーティーでミーティングをしたい!」と申し上げてもあたたく受け入れてくる素敵な場です。私が持っていた「大人は子どもの話に聞く耳を持たない」という偏見がニューノーマルのプロジェクトで打ち壊されたことを思い出しました。

東京大学教育学部附属中等教育学校4年・

Mahiro Umehara

2020年1月23日 3rd Collaborative Inquiry Meeting hosted by Kanazawa エージェンシーとつながり

OECD が提示する「コンピテンシー」や「エージェンシー」などは、ともすると今までの教育とは異なる全く新しいものと捉えられる節があります。最初は自分もその1人でした。しかし、自分の学生時代を思い出すと、「英語は苦手だったけど、仲間とコミュニケーションをとりながら文章を考えるのは好きだったな」など、様々な「エージェンシー」につながる経験が想起できます。

今回の 3rd COLLABORATIVE INQUIRY MEETING by KANAZAWA では高校生と大人が自らの経験から「コンピテンシー」や「エージェンシー」を見つけ出そうと語り合いました。語り合いから「〇〇なところにエージェンシーを感じるね!」「その活動には〇〇な能力が発揮されている気がする」などと他者によって経験への価値付けが行われ、そしてそれぞれの現場で今度は自分が他者を価値付けする存在になろうというつながりが生まれます。

このつながりによって「ウェルビーイング」な世界を目指す地図が創られていくのでは?と本気で思うことができました。次回からも、立場を越え、ともに考えていきましょう。

福井大学教育学部附属義務教育学校教諭・
Hiroki Mikami

私は担任の先生のお誘いで軽い気持ちでこのプロジェクトに参加しました。ですが、良い意味でゆるく、自分の思いをはっきりと伝えることができるので、とても楽しいです。

金沢ラウンドでのグループディスカッションでは、人によって幸せのとらえ方は違うということを改めて感じました。また、世間一般の「イメージ」を鵜呑みにするのではなく、疑うことも重要だということがわかりました。全国各地から先生や生徒が集まって考えるので、多種多様な意見があり、充実した話し合いをすることができました。ここで得た知識を活かし、well-being の実現に向けて努力したいと思います。

石川県立大聖寺高校 1 年・Yuki Matsuda

千代さん、前田先生をはじめ金沢チームの皆様、金沢ラウンド『よりよく生きていくために必要な“能力”とは』という問いで、企画・運営に当たっていただき、ありがとうございました。お疲れ様でした。

幸せになるって、どんな力だろう?ということグループで探究していくと、人生 50 年を過ぎた私は、『これまでの私は幸せだったのだろうか』と思うとともに、『私の家族や私の周りの人たちは幸せだったのだろうか』と考えてしまいました。そう考えた

きに“幸せって、どういうことなのだろう”と、わからなくなりました。幸せって、人によって感じ方は違うのではないだろうか。もしかして、私が幸せと感じていることは、他の人にとって幸せと感じないこともあるのではないだろうか。

私にとっての well-being、あなたにとっての well-being、そして社会の well-being、さらには、地球にとっての well-being って何だろうと、益々わからなくなりました。

これから始まるたくさんの出会いと対話の中で、一人一人とのつながりと皆さんとのつながりを大切にしながら、私なりの New Normal を見つけていきたいと思っています。

福井大学連合教職大学院准教授・
Masazumi Chihara

2020 年 2 月 2 日 Round Table Pre-Session 1 “楽しい学校” カラフルな意見×ラウンドテーブルに向けて

いつも楽しく参加させていただき、ありがとうございます。毎回自分には無いアイデアが皆さんから飛び出してきて、すごく勉強になります。

今回は、私たちがホストを務める奈良ラウンド(2/20, 21)の導入として、“楽しい学校”について皆さんと考えました。カラフルな意見がたくさんで、吸収しきれないほどの学びがありました。しかし、会話が円滑に進みすぎている、という違和感も覚えしました。私たちは、何回もセッションを重ねたことで“できあがった意見”を話すことに慣れ、対話に隙が無くなったような気がしたのです。これでは初めてセッションに参加する方のハードルを上げてしまうことになります。

この感覚を生かし、改善することで全員が話しやすく、アイデアを膨らませられるセッションになるのではないかと思います。奈良ラウンドに向けて準備をしていきたいと思っています。次回のセッションも楽しみにしています!

奈良女大学附属中等教育学校 5 年・Shion Onozawa

本日は様々な観点から学校の在り方について考える素敵な機会を設けて下さり有難う御座いました！対話からは学ぶことがたくさんあり、自分の学校生活にぜひ生かsetらいいなと思えるような素晴らしい意見と出逢えてとても面白かったです。

「楽しい学校」という点で対話を行った際、「探究」「生徒が創る」「一員であることを自覚」などといったキーワードが出てきたため、これらについて考えを深めました。私が興味深いと感じたのは「探究」についてです。

私たちの学校では授業のひとつに探究活動があります。その中ではそれぞれのプロジェクトで個々の興味を反映したり、SDGs などから自分が解決させたい課題を見つけたりするなど、興味と問題解決への意欲をミックスさせて探究を行うという方法を取り入れています。その点から私は自分たちの探究活動をやる意味や面白さを感じていますが、今回の対話で出逢った、違う形で探究活動を行う学校の方からは生徒によって意欲の差が出てしまったり、とれる行動が教師によって制限されてしまうのであまり発展的にはならなかったりするなど、学校ごとの探究活動の行い方によって多くの面でギャップが出てきてしまうことに気づきました。

そこで私たちが注目したのは「生徒が創る」という考え方です。特に今年度は新型コロナウイルスの影響で様々な学校行事が中止になってしまった中で、学校内だけでもできる範囲で行事を企画するなど、生徒ができる行動をとりながら学校を創り上げているという場面を多く見かけました。先程の探究活動についてとの関わりでいうと、生徒が授業を創り上げているということが挙げられます。私たちの学校は開校してから2年しか経っていないということから、授業も手探りな部分が多々あります。学校で探究活動を行っていく上で、改善すべき点やそれに対する代案がある場合積極的に先生方に提案するようにしています。ある物を新しいやり方に変えてみたり、それを全学年に広めてみたりすることは慣れなどの部分で苦労しますが、私たちは「一員であるこ

とを自覚」することでそれを楽しさに変えることができるというふうに考えました。

改めて、本日は本当に有難う御座いました！次回の参加も楽しみにしています。

大宮国際中等教育学校2年・Rino Sugiyama

緊急事態宣言を受け、友人や先輩となかなか会えない状況が続く中で、ニューノーマルプロジェクトのミーティングは人と交流する貴重な機会でもあります笑 毎回楽しんで参加させていただいています。

今回のセッションで一番印象に残ったのは、「もっと休み時間が長ければ、楽しい学校になるんじゃないか」という意見でした。大学の授業がほとんどオンライン化されたということもあり、休み時間に先生や友達に授業の内容を質問したり、友達と雑談したりする時間の大切さを見にしみて実感していました。この言葉を受けて、ただ学力を身につける場としてだけでなく、他者との繋がりや交流を実感できること、そしてその時間を経て自分の考えを深められることが、私にとっての「楽しい学校」だったのかなと思いました。

今回も高校生や社会人の皆さんと意見交換することができ大変有意義な時間になりました。次回も楽しみにしています！

東京大学文科一類1年・Kazumi Takasaki

2020年2月9日 Round Table Pre-Session 2

対話を通して評価・受験を再考する

自分が考えていなかったことをたくさんの方から聴くことができいつも勉強になり、新たな考えを持てる機会になって本当に楽しくさせていただいています。

今回のセッションでは、評価や受験についてグループに分かれて考えるという内容で、色々な方の視点から意見の交流を通して話を深めることができました。

グループで話し合った中で私は、生徒が先生の様子を伺うことについてというテーマがとても印象に

残っています。私は今まで評価が下がることばかりを気にして、授業態度を良くすることを意識していました。しかし、それは間違っていました。評価が下がらないためにと考えるのではなくて、評価が上がるためにすることを考えることが大切であるということ学びました。

今回のセッションを通して、自分の考えを改めて考え直すことができたので、次回また新たな発見ができることを楽しみにしています！

岡山県立瀬戸高校2年・Izumi Okubo

こんにちは。先日は、このようなプロジェクトに初めて参加させていただきました。このプロジェクトは、私自身が、よりよい学校のありかたについて考えることがあったり、興味を持つことがあったりしたため参加を決めました。

最初は、上手く自分の意見を伝えることができるか、伝えることができてもらえてもらえるだろうかと、心配で怖い気持ちがありました。ですが、そんな心配はらず、私だけ自分から意見を出すことができなかつた時には、話しやすいように流れをつくってくれました。また、話が上手くまとまらなくても、すぐ分かりやすいようにまとめて話してくれました。

私が印象に残っていることは、内容はもちろんですが、”他者の意見を否定せずに一緒に考える”ということです。実際に話し合った内容にはないことですし、当たり前のように聞こえますが、普通にできることではないと思います。例えば、学校生活や授業で抱えている悩みや考えを話していても、流されることが多かったです（笑）。しかし、ここでのミーティングでは、一人一人の意見を肯定的に深く考え、話し合いました。私は、まだまだ未熟なので、まず分からない単語が飛び交い、頭に全然入ってこなかったり、疑問が多かったりしました。

そんな私の意見について、色々な人が考えて意見を出してくれたということが、今まで少なかったので、嬉しかったです。その他にも、同じ学生の方、他校の先生方とお話することで、様々な視点から物事を見ることができて、今までにないような考えや思いに沢山触れ、私たちだけじゃないという安心感や新しい発見もありました。

私たちは、教育においても、何でもコミュニティが大事だと話していました。いくら評価や成績が高くても、人間性がしっかりしていないと社会に出るときに困りますし、評価されるべき点は、結果だけではないと思います。たとえ、結果や面接 だけではわからなくとも、未来のために一生懸命頑張っている人がどんな形でも良いから報われて欲しいなと感じました。

最後に、今回は色々な人と色々な意見を交流できる貴重な場を設けてくださり、ありがとうございました。

北海道湧別高校2年・Otoha Kokubun

「受験」「評価」について日常で「なんで？」と思うことはたくさんありました。ですがいざ、話し合いをしてみると「みんなも思ってることだろうし、私が言わなくてもいいかな」と思ってしまいました。今考えてみると疑問を持つこと自体に逆に疑問を持っていたように思います。

日常で疑問に思ったことを口に出して話しあうことはなかなか無い機会ですが、すごく小さな自分の疑問から、「受験」「評価」を超えて日本、世界の価値観に触れて話し合うことができたように思います。

今回のプレでの経験を活かして20日のラウンドテーブルに備えていきたいと思っています。

福井大学教育学部附属中等教育学校9年・

Aika Otori

学びと教えのニューノーマル協働探究プロジェクト 2.0 を企画・運営した若者たち

福井大学連合教職大学院 血原 正純

今回の『学びと教えのニューノーマル協働探究プロジェクト 2.0』では、協働探究ミーティングやラウンドテーブル当日の Zone に関する企画・運営等へ大いに力を発揮していただいたのが、若者たちを代表する高校生でした。私はその活躍に衝撃を受けるとともに、2030 年の日本社会を担っていく若き世代への期待が高まりました。

そして、私はその様子を紹介し記録に残すことで、この出会いと感動体験へ感謝の意を示したいと思います。

1. 『3rd Collaborative Inquiry Meeting hosted by Kanazawa』（第3回協働探究ミーティング）を企画・運営した千代さん

令和3年1月23日（土）午後、『3rd Collaborative Inquiry Meeting hosted by Kanazawa』（第3回協働探究ミーティング）が開催されました。この企画・運営の中心となったのが、金沢大学附属高校2年の千代航平さんでした。そして、千代さんを支えたのが、前田健志先生（合同会社楽しい学校コンサルタント Second 代表で、福井大学連合教職大学院コーディネーターリサーチャー、他に多数）でした。

私が千代さんを知ったのは、令和2年12月22日（火）19時30分から、当日の企画提案とその検討が Zoom ミーティングで行われたときでした。2019年2月の生徒ラウンドテーブル等でつながった高大学生たちと、Zone E のスタッフや有志の大人たちが参加しました。このミーティングで千代さんは、現時点での企画内容の資料を Zoom の画面共有の機能で提示し、「参加者それぞれの経験や活動から、OECD などが唱えるエージェンシー・コンピテンシーというものを再定義、価値共有した上で、今回のテーマである『よ

りよく生きていくために必要な“能力”とは？』を考え、well being の実現に向けたアクションにつなげていきたい。」という考えを語りました。その後、千代さんから3時間のタイムスケジュールが具体的に示されました。千代さんが20名ほどの実践コミュニティの中で、堂々とプレゼンテーションする姿は、私の想像の域を超えていました。説明が終わると最後に、御質問や御意見、アドバイスをいただきたいと大変謙虚な千代さんの姿勢に感嘆したことを、私は覚えています。

そして、1ヶ月後の1月23日（土）、私は改めて、千代さんのコーディネートやファシリテーションに魅了させられました。Zoom ミーティングという環境の中、明るい表情と柔らかい語り口で、時々見せる笑顔は、その場に安心感を作り出していたように思います。

また、参加者の対話を促す話題提供では、このミーティングのテーマ『よりよく生きていくために必要な“能力とは？”』に迫るための視点として、福井大学連合教職大学院の木村優先生から『OECD Better Life Index』の指標を提案いただきました。さらに、二つ目の対話ではOECDの田熊美保氏をコーディネーターに立てて、パネルディスカッション形式で『student agency を、あなたならどのように日本語に訳しますか』等の問いが投げかけられ、パネラーの一人として千代さん自身が語っていました。この二つの場面を設定するだけでも複数回の打合せが必要だったのではないだろうかと推察され、大変感心させられました。

圧巻は、アイスブレイク後・ブレイクアウトルームによる二度の対話活動後の共有場面における参加者とのやり取りでした。参加者の発言を丁寧に受け止

め、共感的に意味付けて価値付けていく様子は、これまでの経験の豊富さが窺える場面でした。

私自身、千代さんからは世代を超えた人々と協働してワークショップをデザインする一つの方法を示していただけたと思っています。今回の探究テーマにふさわしい話題提供の内容をゲストに依頼して調整したり、Zoom の操作はコンサルタントを専門としている前田先生に任せたりできるところは、千代さんが多くの大人たちとつながっているという強みが活かされたところだろうと推察しています。

2. 『4rd Collaborative Inquiry Meeting hosted by Team Nara』（未来の学びと教えの地図づくり）を企画・運営した奈良女子大学附属中等教育学校 5 年生の 4 名

令和 3 年 2 月 20 日（土）午後、実践研究福井ラウンドテーブル Zone E『4rd Collaborative Inquiry Meeting hosted by Team Nara』（未来の学びと教えの地図づくり）が開催されました。この企画・運営の中心となったのが、奈良女子大学附属中等教育学校 5 年生の藪内悠登さん、小野澤詩音さん、坂本一眞さん、西窪慶さんの 4 名でした。このときのオンライン・ライブ形式のワークショップを奈良会場にて生で拝見し、その様子は今でも私の脳裏に焼き付いています。そして、この 4 名を支えていたのが、奈良女子大学附属中等教育学校の塩川史先生と鮫島京一先生でした。

令和 3 年 1 月 26 日（火）20 時 10 分から、当日の企画提案とその検討が Zoom ミーティングで行われました。このミーティングで藪内さんは、現時点での企画内容の資料を Zoom の画面共有の機能で提示し、「参加者の学びの成果を発表する機会として、できればポスターセッションを行いたい」、「ワークショップで受験・評価のニューノーマルをデッサンするため、理想の社会や理想の学校像から具体的に迫りたい」という考えをホスト生徒チームの代表として説明しました。特に、ワークショップの場面では、アイスブレイクで『理想の社会や学校像を語る』ことを行い、対話の一つ目で『一人一人が経験してきた受験について思い起こす』ことをグループで語り合ってもら

うのはどうだろうか。そして、対話の二つ目で『受験の特質と理想の社会や学校像とのギャップを考える』ことにグループで取り組んでもらい、最後に、受験のニューノーマルを企画書にアウトプットしていく展開はどうだろうか、と具体的に提案されました。この提案に対して大人たちからは、テーマが重いのではないだろうか、対話 1・対話 2・企画書の作成と順に進んでいく中で自然と企画書ができあがるとよいのではないだろうか、どんな人に参加してもらいたいのか、裾野を広げたいのか深めたいのか、みんなが参加してよかった、次も参加したいと思えるだろうか等の意見が寄せられ、この企画は、裏トークとして開催されました（21 日（日）午前、高校生と大学生の有志による若者たちのラウンドテーブルが、ホスト生徒チームを中心に進められました）。

後日、プレミーティングも開催されて、2 月 20 日（土）は『楽しい学校をデッサンしよう』というテーマで、ワークショップが実施されることになりました。

2 月 19 日（金）の夕刻、私は当日の Zoom ホストを担当することとなっていたため、奈良に入りました。宿泊先でメールチェックを始めたとき、私は木村先生からのメールの添付文書に心を動かされました。その添付文書は、藪内さんから場づくりメーカー（通称、ファシリテーター）への依頼メッセージでした。中でも、約 22 分間にわたる動画に藪内さんが登場して、当日の流れとそのときの場づくりメーカーの役割や動きを説明している姿に、私は魅せられました。そして、動画視聴が難しい場合の対応として、三つの場面に分けてそのときの場づくりメーカーの役割や動きが文章で、丁寧に説明されていました。さらに驚かされたことは、2 月 20 日（土）12 時から 30 分程度の時間で質疑応答を行うことが設けられていたことでした。その 30 分後には、本番を迎えるけれども、大丈夫なのだろうかと不安を感じましたが、今思うと、他の 3 名への信頼がその対応に表れていたのではないのでしょうか。

2 月 20 日（土）9 時頃、私は会場入りしました。会場は鮫島先生をはじめ数名の奈良の教員スタッフで、カメラ、大型モニター、大型スピーカー等がセッ

トされて、スタジオ化されました。メディアセンターがライブ中継にふさわしい会場へと変身しました。10時30分頃、藪内さん・小野澤さん・坂本さん・西窪さんの4名と塩川先生がスタジオに入り、4名の立ち位置に合わせてカメラ位置が調整されました。さらに、4名の語りに合わせてマイクやスピーカーの音量が調整されたり、4名のファシリテーターが自身の動き等を確認するための大型モニターの位置が決定したりしました。加えて、リハーサルは塩川先生の関わりのもと、和やかな雰囲気の中で進んでいきました。

13時、4名の高校生はしっかりと昼食を取ることできずに、本番を迎えていました。一方、私は12時より参加者の接続に対して許可を行い、迎え入れるとともに、ホスト権限が私に委譲されていたため、探究カフェ（一人一人がいま取り組んでいたり、これまでに取り組んできたりした探究について、紹介し合う活動）のブレイクアウトルームを作成していました。若者と大人が混ざり合ったグループ構成かどうかを確かめ始めたところ、私のインターネット環境が断絶し、ホスト権限がZoomミーティングを立ち上げた木村先生のパソコンへ戻されてしまいました。そして、私は共同ホストとしての権限も失ってしまいました。木村先生は13時30分くらいまでZone Aのゲストだったため、私はその後、木村先生のパソコンの前に座り直し、時間に追われていたことから、最終の確認を諦めてブレイクアウトの開始ボタンをクリックしました。また、当日の午前中に急遽、欠席の連絡が相次いだことで、12時前にあるグループの場づくりメーカーをしてほしいと、木村先生から依頼もありました。正直、私は度重なるイレギュラーで、4名の高校生と同じ会場にしながら、その様子を冷静に見聞きすることができなくなっていました。

私が冷静さを取り戻したのは、グループごとのワークショップを終え、様々なグループの『楽しい学校』に関するスライドが画面共有されながら、そのグル

ープの代表者が語り始めた頃でした。4名の高校生は発表のあったスライドとその内容について意味付け、価値付ける的確なコメントで対話したり、グループ活動中にスライドの進行状況とその内容を丁寧に把握して指名依頼につなげたりしていたところ等に、私は感嘆させられました。

ホストがZoomミーティングを切断すると、会場が4名に対する賞賛の拍手で包まれたことは、必然のことでした。私自身、この奈良女子大学附属中等教育学校5年生の4名からは、同世代の仲間と協働してワークショップをデザインする一つの方法を示していただけたと思っています。特に、複数名でファシリテーターを務め、その対話によって全体進行が行われることの効果として、親近感がわいたりリラックスした雰囲気が作り出されたりしたのではないのでしょうか。

今回、私は『Zone E 探究』の『学びと教えのニューノーマルの協働探究プロジェクト2.0』への参画を通して、改めて、若者たちと大人たちで創り上げるラウンドテーブルの素晴らしさを再認識することができました。

このZone Eの前身は『生徒ポスター』や『生徒ラウンド・セッション』にあります。つまり、教師・大人の研究会に生徒・若者が参加することから始まりました。

そして2020年6月、『学びと教えのニューノーマルの協働探究プロジェクト1.0』からは、若者と大人の協働探究がスタートしました。さらに2021年2月、『学びと教えのニューノーマルの協働探究プロジェクト2.0』では、若者たちが企画し運営する協働探究のワークショップに若者たちと大人たちが集いました。

次に開催される2021年6月、『学びと教えのニューノーマルの協働探究プロジェクト3.0』ではどのような発展があるのか、本当に楽しみです。

Zone E 探究の余白に

奈良女子大学 鮫島 京一

連合を組ませていただいている奈良女子大学の文脈から、この Zone. E について述べてみたい。

私たちは、2018 年度より、連合を組ませていただいている。奈良女子大学が積み重ねてきた開放制の教師教育と附属学校園の教育実践・研究を 21 世紀につなげる戦略の一つとして、「実践の語り直し」「省察」そしてこれらを支える「コミュニティの形成」という福井大学の教師教育の力を借りたかったからである。しかし、福井モデルを真似ることは到底できない。そこにおける教師教育のコンセプトと主体的に向き合い、自己改革をすすめることが、私たちの課題となっている。一歩進んでは二歩下がる、を繰り返している。

連合に加わったことを機に、2013 年より附属中等教育学校で開催してきた「実践交流ラウンドテーブル」が福井ラウンドのカーボンコピーであったことを反省し、2019 年 11 月より、奈良女子大学の連合教職大学院が主催する「協働探究ラウンドテーブル」（奈良ラウンド）へと刷新した。そこで大事にしたことは二つであった。

第一に、私たちの持ち味である全国的な高校教師のネットワークをもっていることを活かし、生徒と教師がともに学び合う場を創ることである。第二に、私たちの「実践交流ラウンドテーブル」の中にある物語——福井ラウンドに魅了され、自分たちでやってみたら、世界の見え方が変わった——を吟味し、ラウンドテーブルにおいて大事になることを再抽出し、磨き上げることである。福井ラウンドを大文字の Round Table とすれば、「協働探究ラウンドテーブル」（奈良ラウンド）、私たち奈良女の親友である「札幌ラウンドテーブル」、そして 2020 年 11 月に関西国際大学と私たちが共催した「尼崎ラウンドテーブル」は、それぞれの持ち味を活かした小文字の round table(s) ということになる。

何が言いたいのか。福井ラウンドテーブルが新しい段階に入ったということである。それを象徴する

のが、この Zone. E であると考えているのだ。どこが新しい段階なのか。

第一に、小文字のラウンドテーブルが試みていること、つまり、それぞれの場の特徴を活かし、生徒と多様な大人が対話し、自他ともに理解を深めていく学び合いの場を創り出していくという試みを高い次元で総合し、大文字のラウンドテーブルをさらに豊かにしたところである。そのことが、第二としての新しさ、Zone の設計方法を大きく変えたことにつながっている。それまでは、Zone に参加することが Zone をつくることであった。福井大学が設計し、私たちが参加する、というかたちである。それを、Zone をともに設計することからはじめていくように変えたことである。Zone の企画から当日までが一連の学習過程になったのだ。学びの拡張・深化と言えばよいだろうか。第三として、Zone の企画運営において大きな役割を演じたのが、中高生だったということである。自分たちが感じ考えていることを出発点とし、対話を重ね、多くの人々を対話の場に招き入れるという、大人でもなかなかできないことに挑み、具体化したのである。中高生が参加者ではなく、企画者・設計者となったのである。

Zone. E が掲げた「若者たちと大人たちによる新しい学びの地図のデッサン」という副題は、こうした試みをこれから進めていくのだという宣言ではないだろうか。

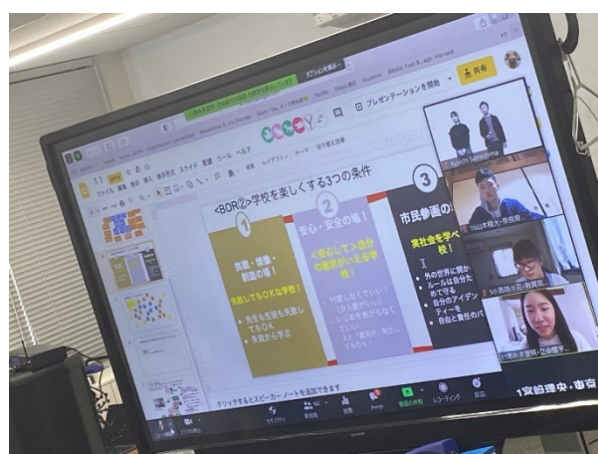
実際、奈良女子大学は、Zoom 会場の本部として、場所と機材を提供したにすぎない。Zone. E に関わった人の中には、この Zone を「奈良ラウンド」として受け取められた人も少なからずいたと聞いているが、そうではない。Zone. E は、福井ラウンドの新しい試みであり、私たち奈良女は、それに至るささやかな経験と場所と提供したに過ぎない。Zone. E は、「学びと教えのニューノーマル」という探究課題ののもと

に集まった、中高生・大学生をはじめとした大人たちによる協働作品なのだから。

福井ラウンドの新しい段階の幕開けである。それゆえに、解決を要する課題もまたあらわになったともいえる。そのことを煎じ詰めて言うならば、大人の果たすべき役割とは何か、ということである。なかなかの難題である。



世界一周に耐えられるクルーザーヨットは、いつも未完成である。船をつくっただけでは完成しない。実際に海を走らせ、何度も何度も不具合を調整し続けることによって、はじめて航海に耐えられる船になっていく——Zone.E も、学び続けることも、生きることも、そして大文字であれ、小文字であれ、ラウンドテーブルも、みな同じであると観じる。



Zone F インクルーシブ

多様な子どもたちの学びと育ちを支えるコミュニティを培う

インクルーシブ Zone を問い直す

福井大学連合教職大学院 荒木 良子

ZoneF は実践研究福井ラウンドテーブル 2021 Spring sessions で新たに立ち上がった Zone である。「特別支援は細々とやってきたが、インクルーシブ（特別支援）として一つの Zone が立ち上がることを感慨深く思う」とある先生が言われた言葉に深く頷くとともに、インクルーシブという分野ではなくて、授業研究の中に組み込まれて、語り合うことができたらいなと願っているわたしにとっては、ZoneF の立ち上げには複雑な思いを抱いた。この Zone で語り合うことは何かと自問自答が続いた。悩み続けた

ZoneF について、わたし個人の視点から振り返ってみたい。

ZoneF は前半をシンポジウム、後半を三つのグループに分けてのフォーラムとして開催された。シンポジウムでは、小学校の志田校長先生が体制を作ることについて話をされ、南雲先生と川崎先生は小学校の通常学級におけるインクルーシブ教育の実践について語って下さった。校長先生が特別支援教育の意義を理解されて体制面から支えられることが、直接に実践に携わる教職員にとってどれほどに心強く、

安心であろう。報告の行間にあるたくさんのきめ細やかな志田校長先生の対応も見えるようであった。

小学校の二つの実践は特性のある子どもや、特別な配慮ということばすら不要に感じた。通常の日常の中で、どの子の「学びたい」も叶える授業展開することの具体を示していただいた。

続くフォーラムでは、小学校の通常学級における総合学習（伊那小学校 井澤先生）、高校における通級指導（奥越明成高等学校、石倉先生）特別支援学校中学部（福井大学教育学部附属特別支援学校 小嵐先生）における探究的な授業実践の3グループで、校種・年齢を超えて、充実した報告があった。

フォーラム A グループ（わたしは進行を担当）での井澤先生のご報告は、子どもの多様な個性がそれぞれに大切にされることと学級としての学びが深まっていくことが織りなすように語られていて興味深く聴くことができた。参加者は小学校通常学級・特支学級・特支校・行政と多岐にわたっており、それぞれの方がそれぞれに今、直面する課題との関係で報告を聴いておられ、（グループセッションの柱を立てなかったのも）、グループのメンバーの思いがそれぞれに展開することになった。シンポジウムの志田校長先生が参加したグループでは特支学級の先生からの質疑・悩み相談が中心になっていった。理解授業・子ども同士が問題を起こしたとき保護者にいつどのように伝えるか等々である。クラスでの日々子どもたちとの火係わり合いと授業作りに悩まれる先生が多かったグループでは、いろんな子どもさんがいて、一人一人大切に、一人ひとりに対応したいが、授業が成り立たなくなると切実な悩みが吐露された。多様な基盤や経験の参加者がいる中で、小学校・中学校の授業実践について深めていくには、工夫が必要だと進行担当としては申し訳なく思ったが、日頃の悩み

を打ち明ける場所も容易にはないのかも知れないことも推察された。

フォーラム B は高等学校の通級指導という新しい分野からのご報告であり、高校での取組が展開されつつあることを参加者は具体的な実践として知ることができた。

フォーラム C は特別支援学校からの実践報告であったが、生徒たちの活動の深化が実現した要因を「活動を認める」「安心できる環境」「居場所」という言葉で表現し、シンポジウムの南雲先生や川崎先生の報告との繋がりの中で捉える発言があった。

わたしは当初、インクルーシブ教育が「特別支援」に限定されて受け取られるのではないかと危惧し、多様性を掲げるならば、多文化多言語共生やLGBTなど、もっと幅広く多様性にと捉えて話題を募るべきではないかと考えていたが、第1歩目として特別支援という視点を定めることで、実現したシンポジウムやフォーラムであることを強く実感した。つまり「多様な存在が含まれる集団の持つ豊かさ」というインクルーシブの本質的なことが明示されたように思う。本 Zone の冒頭の話提供（松木先生）で示された「問われる新しい学力」との繋がりの中で、シンポジウムやフォーラムでの報告を捉え直し、価値づけていくことが、ZoneF で語り合えることなのだろうと考えた。それが授業研究という共通の基盤で年齢・校種・教科を越えて共に語り合うことであり、そのためにはインクルーシブという視点をしっかり据えた Zone を育てていくことが大切だと考えるようになった。

今は、その途上にある。わたしたち自身が、異校種、異年齢、異能力のインクルーシブ実践の話を聴くことから始まる。もちろん聴き合うための、仕掛けは必要である。これからの ZoneF の取組である。

インクルーシブグループに参加して

福井県立ろう学校 田邊 みちよ

ろう学校では近年、単一聴覚障がい以上に、知的や発達障がいを併せ有する子どもたちが増加してきています。その中で、「在籍児が多様化するろう学校という特別支援学校における、インクルーシブ教育とは？」という問い掛けが自分の中にありました。今回 Zone F への参加をとおして、何かヒントを得たいと思いました。

シンポジウムでは、南雲先生から、小学校における多様な子どもたちがいるからこそその授業や学級づくりについての実践報告がありました。「授業が単なる知識披露の場ではなく、考えを交流させる場であることを大切にすることで、不完全なところを助け合う関係性が育まれ、その先にインクルーシブな世界がある」と述べられていました。川崎先生は、協働探求の実践の中で、「子の学びのストーリーを重視し、先を見ながら学びをデザインしているが、学びから外れる子もいる。しかし、本来子どもは学びたいと思っている。そのような個々の活動を支えるコミュニティを作っていきたい。それが未来の社会を創る力を培うことに繋がる」と述べられていました。いずれの先生も、多様な子を含めたコミュニティだからこそ生まれる育ちや学びがあることに気付き、集団の中での個の活動を大切にされていました。それがインクルーシブな世界=未来の社会に繋がると感じておられました。また、志田校長先生からは、インクルーシブ教育を根幹とした丁寧な学校づくり、授業作

りの実践報告がありました。学校づくりでは、子・保護者・教員に「よりそう」こと、校内体制・専門機関に「つなぐ」ことを大切にし、授業づくりでは、丁寧な状態把握、児童の状態に応じた指導法の工夫等、特別支援教育の視点を取り入れることを大切にされていました。「インクルーシブ教育を根幹とする」と明確な方針が提示されていることで、学校全体の取組として確実に根付いていったのだと思いました。

フォーラムでは、小嵐先生から、様々な特性がある子による集団の授業実践報告がありました。「個々の特性を生かした参加を認める中で、個々に寄り添い個々の学びや活動を支援することで、個々の活動が繋がり集団活動が成り立ってきた」と述べられていました。集団での取組ありきではなく、核になる子ども、入りきれない子の参加場所を考える実践の根底にはインクルーシブ教育の視点が、無意識に根付いており、重厚な実践でした。

シンポジウム・フォーラムをとおして、報告をされた先生方の中に、多様な子一人一人が共に学べる集団作りが当たり前意識され、インクルーシブ教育の視点が当たり前根付いていることを実感しました。本校でも、教員一人一人の意識の中にインクルーシブ教育の視点が根付き、多様な子を含めたコミュニティ作りができるよう、自分の立場でできることを実践していきたいと思いました。ありがとうございました。

* 本号の執筆者の所属は 2020 年度のものです。

【編集後記】新しい院生やスタッフを迎え、教職大学院の新たな1年が始まりました。今年度もどうぞよろしくお願い致します。新年度、最初に発行されるニュースレターが、2月のラウンドテーブルのふり返りというのも不思議な感じがするかもしれませんが、自分たちの取組を丁寧に振り返ることを通して、実践の次の展開を開いていこうとする教職大学院の学びの在り方を象徴するような号になったのではないかと思います。今年度も充実したニュースレターをお届けできればと思います。(W・Y)

教職大学院 Newsletter **No.145**

2021.5.10 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtkfukui@yahoo.co.jp